

世代交替を迎えるインドネシア仏教界

——アシン・ジナラツキタ師の葬儀に参列して——

木 村 文 輝

一 アシン・ジナラツキタ師と インドネシアの現代仏教

かつてインドネシアに花開いた仏教文化は、後にこの地域に浸透したイスラーム勢力によって徐々に駆逐され、一七世紀頃までにバリ島などの一部の例外を除いて表面上は途絶した。しかし、この失われた伝統を復興させる運動が、一九世紀の末に始められた。それ以来、今日に至るまで約百年に及ぶインドネシアの現代仏教の歴史は、二〇世紀半ばにおけるインドネシア共和国の独立をはさんで二つの時期に大別される。

第一期は、当時この地域を支配していたオランダ人を中

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

心とする神智学協会のメンバーや、中国系インドネシア人の郭徳懐（Kwee Tek Hoay）などが中心になって推進された。ただし、彼らの活動は主に知識人層に対する仏教思想の紹介にとどまり、仏教信仰を人々の間に根付かせるには至らなかつた。その意味で、第一期は仏教復興の萌芽期、もしくは、第二期のための準備期間であつたと位置付けることができる。

それに対して、第二期には諸外国の仏教界との積極的な交流や、様々な出自の人々に対する本格的な教化活動が繰り広げられた。その結果、現在では仏教がインドネシア政府の公認する五つの宗教の一つに数えられており、同国内には数百万人の仏教徒が存在すると言われている。こ

のような第二期の活動を中心になって推し進めたのがアシン・ジナラッタキタ師 (Ven. Ashin Jinarakkhita Mahasthāvīra, 體正老和尚) である。一九二三年に中国系インドネシア人として生まれた同師は、一九五四年に現代のインドネシア人として初の比丘になり、一九五九年には同国初の比丘僧伽の設立を主導した。また同師は、多民族国家であるインドネシアの仏教は上座、大乘、金剛乗などの垣根を越えた総合仏教でなければならないという信念から、特定の流儀にとらわれることのない「ブツダヤーナ」、すなわち「仏乗」思想を唱導した。さらに、インドネシア国民は「唯一神への信仰」を守らなければならないという政府の方針に応じて、本初仏（アーディ・ブツダ）を仏教における「唯一神」として導入した。

しかしながら、このようなアシン・ジナラッタキタ師の方針は、後に同師に対する反対者をも生み出した。そのため、一九七〇年代には純粹な形での上座仏教や大乘仏教の布教を目指す人々が独自の比丘僧伽を設立し、インドネシア仏教界の分裂は確定的となった。こうした対立の発生をも含めて、二〇世紀後半における同国仏教界の歩みは、ほぼ完

全にアシン・ジナラッタキタ師の活躍の軌跡と重なっている。また、今日のインドネシア仏教界が抱える問題点や特色の多くは、何らかの形で同師に由来すると言っても過言ではない。

そのアシン・ジナラッタキタ師が、二〇〇二年四月一八日に世寿八〇歳、比丘歴四八年にて円寂された¹⁾。既にインドネシアの仏教界や仏乗教団の内部では指導者の世代交替が進みつつあったとはいえ、今だ同師がその象徴的存在であったことに変わりはない。それ故、同師の死は、同国の現代仏教史における第二期の終焉を告げるものとなった。

私は一九九七年一月と二〇〇一年三月の二度、生前のアシン・ジナラッタキタ師と面会し、直接インタヴューを行ったことがある。この時に同師から得た情報にもとづいて、私は同師の活躍を中心とするインドネシアの仏教復興の歩みと、同国仏教界の状況などを教編の小論として発表²⁾した。私が初めて同師のもとを訪れた時、師は自分が既に高齢であり、「あと五年早ければ、もつと多くのことを語ることができたであろう」と、私の来訪が遅れたことを残念がった。しかし、その言葉とは裏腹に、その当時間も同師は「空飛ぶ

「比丘」の異名の通り、布教のために各地を精力的に飛び歩いていた。ところが、その後間もなくして同師は体調を崩し、次に私が出た時には車椅子を使用し、わずかな会話にも多くの困難を伴う状態であった。そして今回、私はアシン・ジナラツキタ師の訃報に接し、直ちにインドネシアを訪れた。しかし、訃報を受け取ったのが同師の没後一週間を経た段階であり、私が現地に着した時には、遺体は既に棺の中に納められ、その日に行われる荼毘を待つばかりであった。

本稿では、アシン・ジナラツキタ師の一連の葬儀の模様を、後日現地の関係者から伺った内容や関連の新聞記事などをもとにして、確認し得た範囲で報告する。また、私自身が参列した部分に関しては、私の見聞も交えながら記述を進める予定である。その上で、約十日間に及んだ一連の葬儀を通して垣間見られた仏乗教団の現状と、次世代に託された課題について若干の検討を行うことにしたい。

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

二 葬儀の概要

(一) ジャカルタにて

四月一八日午前七時二〇分、アシン・ジナラツキタ師がジャカルタ市内の病院(Putih Hospital)で息を引き取った。その直後から、病室に集まった弟子達によって枕経の儀式が執り行われ、以後、湯灌の間も途絶えることなく、約八時間にわたって阿弥陀仏の称名が続けられた。その後、同師の遺体はベッドから起こされて、椅子の上に坐禅の姿勢で安置された。午後四時頃、遺体は病院を出発し、約一時間後に同市内における仏乗教団の中心寺院であるヴィハラ・エーカーヤナグリハ(Vihara Ekayana Grha、一乗禅寺⁴)に到着した。同寺院では、既に同師の危篤が伝えられていた前日から、メインホールの西側の部屋に遺体を安置する場所を設置して、アシン・ジナラツキタ師の帰還を待っていた。その空間は四方にめぐらせた黄色い幕によって境界がはられ、入り口には外側に向けて釈迦牟尼像が祀られた。一方、最奥部の正面にはアシン・ジナラツキタ師の肖像画が飾られ、その左右に遺誡が掲げられた。また、肖像画の

下にはチーク材で作られた約一メートル四方の坐棺が置かれ、同師の遺体はその棺の前に安置された。さらに、遺体の前には位牌と香華灯燭、供物などが並べられ、直ちに遺体奉安の儀式が行われた。

午後十時、同師の遺体は弔問に訪れた多数の信者が見守る中で、坐禅の姿勢のまま棺（龕）に納められた。その際に営まれた入龕（進龕）仏事では、中国の出身で、現在インドネシアで活躍している大乘比丘、プラバシツダ師（Ven. Prahasiddha Mahashavira、悟通老和尚）が導師を務め、法語を読み上げた。ちなみに、今回の一連の葬儀では、アシン・ジナラツキタ師の孫弟子であり、現在ヴィハラ・エーカヤナグリハの住持であるとともに、アシン・ジナラツキタ師を主席に戴く比丘僧伽、すなわちサンガ・アグン・インドネシアの副主席でもあるアーリヤマイトリ師（Ven. Aryamañtri Sthavira）が全体を統括し、大半の儀式で導師を務めた。しかしながら、特に重要な入龕、鎖龕、起龕、乗炬の四つの仏事に限っては、アシン・ジナラツキタ師と師弟関係にない比丘が導師として招請された。

翌一九日午前一〇時三〇分、棺の蓋を覆う鎖龕（封龕）

仏事が行われた。その際の導師は、メダン出身の大乘比丘であるプラジュナヴィラ師（Ven. Prajnavira Mahashavira、慧雄法師）が務めた。そして、遺体の周囲に香木やジャスマンの花が詰められた後、棺の蓋が閉じられた。

この後、アシン・ジナラツキタ師の追善法要は、遺体が荼毘に付される二八日まで毎日四回繰り返された。すなわち、午前五時から大悲心陀羅尼、十小咒、般若心経が読誦され、午前九時から金剛般若経、午後五時から阿弥陀経、午後七時から再び金剛般若経がそれぞれ読誦された。また、それぞれの法要では阿弥陀仏の称名も繰り返された。これらの法要には、サンガ・アグン・インドネシアに所属する約九〇名のすべての僧侶が参加しており、台湾やインド、シンガポール、ミャンマーなどに留学中の僧侶や中国在任の僧侶も、ジャカルタに到着次第順次法要に加わった。一方、同僧伽からかつて分離独立し、現在では同僧伽とともにインドネシア仏教僧伽連合会（K A S I）を構成しているサンガ・テラヴァーダ・インドネシアやサンガ・マハーヤナ・インドネシアに所属の僧侶達は、一連の葬儀における重要な儀式に列席したものの、必ずしも常に全員

が参集したわけではなかった。

ところで、アシン・ジナラツキタ師の逝去は、サンガ・アグン・インドネシアの副主席であり、それぞれ同僧伽に所属する上座比丘、大乘比丘、金剛乘比丘の代表でもあるジナダンモ (Ven. Jinadhammo Mahathera) 、アーンリヤマイトリ (Ven. Aryamaitri Sthavira) 、ヴァジュラサガラ (Ven. Vajrasagara Sthavira) の三師の連名による新聞広告などを通して、同国内の仏教徒に通知された。とりわけ、ジャカルタ周辺に住む仏教徒の多くが中国系の人々であるため、「国際日報」のような中国語の新聞には全面広告が掲載された。それを受けて、ヴィハーン・エーカーヤナグリハには、棺が同寺院に安置されていた一週間の間に、約四万人が弔問に訪れたという。その中には、アシン・ジナラツキタ師と個人的に親交のあったアブドウルラフマン・ワヒド前大統領をはじめ、開発統一党党首のハムザ・ハズ副大統領、ゴルカル党首のアクバル・タンジュン国会議長などの政界関係者、並びに、カトリックのレオ・スルヤアトマジャ枢機卿、イスラームのサハル・マフフズ・ウラマ会議長などの他宗教の代表者も含まれている。さらに、一般市

世代交替を迎えるインドネシア仏教界 (木村)

問客の中には、仏教徒のみならずイスラームの信者のグループも含まれていた。

四月二六日午前八時、アシン・ジナラツキタ師の遺体を納めた棺をヴィハーン・エーカーヤナグリハから送り出す起龕仏事が、入龕仏事の時と同じくプラバシツダ師 (悟通老和尚) の導師のもとに行われた。その際に、サイド・アギル宗教大臣が同師の功績を称え、その葬儀を委ねるとの意味で、同師の肖像画をアーンリヤマイトリ師に手渡した。その後、同師の棺は集まった数千人の信者に見送られながら、愛用の錫杖と扨子、五如来幡、仏教旗などを先頭に、すべての僧侶と仏乗教団の代表者達の持つ黄色い布にひかれて同寺院を出発した。

しばらくして移送車に乗せられた棺は、ジャカルタ市内を離れ、メラ港からフェリーボートでスマトラ島のバカウへ二港へ上陸した。そして、予定より二時間程遅れて午後五時一〇分頃、目的地のバンドル・ランプン市に到着した。ジャカルタからは約一三〇台の車に分乗した弟子達と信者達が従い、バンドル・ランプンでは数千人の仏教徒が合掌し、阿弥陀仏の名号を唱えながら同師の棺を出迎えた。到

着後、棺は車から降ろされて、それまで棺を護持してきた
仏乗教団のジャカルタ支部の人々から、同教団のランブン
支部の人々に委ねられた。そして、再び葬列が組まれ、同
市内の大興廟 (Thay Hin Bio, Vihara Mahopadhi) に運
ばれた。棺は大興廟の前庭に特設された祭壇の正面に安置
され、直ちに遺体奉安の儀式が行われた。ここでは二八日
までの二日間に、約一万五千人の信者がアシン・ジナラッ
キタ師に最期の別れを告げに集まったと発表されている。

(二) スマトラ島から再びジャワ島へ

アシン・ジナラッキタ師の訃報を受けて四月二七日の朝
日本を発つた私は、その日の午後七時三〇分頃にジャカル
タのヴィハーラ・エーカヤーナグリハに到着した。アシン・
ジナラッキタ師の棺は既にスマトラ島へ移された後であっ
たが、同寺院には午後七時から行われた同師の追善法要に
参列した人々が多く残っていた。私は約一時間後に車で同
寺院を出発し、スンダ海峡を渡り、バンドル・ランブンへ
は翌二八日の午前五時頃に到着した。ちなみに、この晩も
百台近い車に分乗した信者達が、ジャカルタからバンドル・

ランブンへ向かったようである。

同日午前七時三〇分、参列するすべての僧侶が大興廟に
集まると、まず始めに上座の僧侶達がパーリ語による経典
の読誦を約三〇分間行い、次に金剛乗の僧侶達がジャワ語
による読誦を一五分間程行つた。その後、大乘の僧侶達が
中国語による読誦を行つた後、約四五分間にわたつて阿弥
陀仏の称名を繰り返した。その間、私も日本から持参した
僧衣をまとい、大乘の僧侶の中に座を占めた。

午前九時、ウマルソノ・ランブン州知事がアシン・ジナ
ラッキタ師の功績を称え、同師の葬儀を委ねるとの意味で、
その肖像画をアーリヤマイトリ師に手渡した。そして、棺
を大興廟から送り出す起龕仏事がここでも執り行われた。
朝から続いていた小雨が儀式の途中で一瞬雨脚を強め、や
がて天気は急速に回復した。

午前九時四五分、大興廟から出された棺はヴィハーラ・
エーカヤーナグリハを出発した時と同様に、沿道を埋め尽
くした数多くの人々に見送られながら、僧侶と仏乗教団の
代表者達にひかれて、約一キロの道程を三〇分程かけてゆっ
くりと進んだ。その後、棺は車に乗せられて、約六キロ離

れた「ボーデイサットヴァ(菩提薩埵)」という名前の火葬場に運ばれた。

午前一一時、火屋の前に棺が安置され、付き従って来た僧侶と仏乗教団の代表者達が着席すると、アシン・ジナラツキタ師の略歴の紹介、インドネシア仏教僧伽連合会の弔辞、仏乗教団の弔辞が読み上げられた。その後、中国出身でシンガポール在住の大乗比丘、八八歳のチョンセン師(Ven. Cong Seng Mahasthava, 宗成老和尚)が導師となって乗炬仏事が営まれた。同師の洒水によって棺の周囲が清められ、法語が読み上げられた後、棺は火屋の中に移された。次いで、参集した人々が阿弥陀仏の称名を繰り返す中を、すべての僧侶と仏乗教団の代表者達が各々白檀の粉の入った蓮華の容器をもって棺の周りを右回りに一巡し、最後にその容器を捧げて別れを告げた。そして、一二時三〇分、チョンセン師によって茶毘の火が点ぜられた。茶毘は約八時間に及んだという。

翌二九日、収骨の儀式が営まれた。しかし、私は遺体が茶毘に付せられた直後に多くの信者達とともにジャカルタへ戻つたため、残念ながらその日の状況は詳らかではない。

世代交替を迎えるインドネシア仏教界(木村)

収骨に際しては、その前後に上座の僧侶達によるパーリ語經典の読誦と、大乘の僧侶達による中国語經典の読誦が行われたということである。そして、アシン・ジナラツキタ師の遺骨と数人の弟子達を除き、他の人々はこの日にジャカルタへ戻つてきた。

三〇日、同師の遺骨はバンダル・ランプンを離れ、高速艇でスマトラ島をあとにした。そして午後一時を過ぎた頃、遺骨は約三〇〇人の僧侶や信者達が出迎える中を、五如来幡と位牌と肖像画に先導されて、ジャカルタ市郊外のパナイ・ムテイアラ港(Pantai Mutiara)に上陸した。その後、一行は直ちに車列を整えて、市内にある廣化寺(Kong Hoa Sie, Vihara Vaipulya Sasana)に向かった。同寺院は、一九五三年にアシン・ジナラツキタ師が中国人の臨濟僧、本清(Pen Ching)和尚のもとで初めて出家し、大乘仏教の沙弥として體正(Ti Chen)という法名を授けられた所である。同年、體正沙弥は本清和尚の経済的な支援によってビルマに渡り、翌一九五四年、そこで改めて上座仏教の沙弥となり、その直後に比丘としての具足戒を受けるとともに、アシン・ジナラツキタという名前を師匠のマハー

シ・サヤダウ師 (Ven. Mahasi Sayadaw Maha-thera) から授かったのである。

午後三時、廣化寺に到着した遺骨は、同寺院の開創者でもある本清和尚を祀る部屋に運ばれ、同和尚の写真と位牌の前に設けられた祭壇上に安置された。そこではアーリヤマイトリ師が導師となって法要が営まれ、弟子の代表と信者の代表による坐拝が順次行われた。約一時間後、一行は再び車列を組んでジャカルタの南に位置するボゴール市を越え、約八〇キロ離れたチパナス郊外にあるヴィハーラ・シヤキヤワナラン (Vihara Sakyawanaram, 釈林禅寺) に向かった。この寺院は、一九七二年にアシン・ジナラックイタ師によって建立され、それ以来同師が活動の拠点としていた場所である。

午後六時三〇分頃、一行はヴィハーラ・シヤキヤワナランに到着した。同寺院では、アシン・ジナラックイタ師が起居していた建物の南庭に特設の会場が設けられ、その最奥部に高さ四メートル程の七重塔が設置されていた。遺骨はその塔の最下層に納められ、再びアーリヤマイトリ師が導師となって約一時間に及ぶ法要が営まれた。こうして、ア

シン・ジナラックイタ師の葬儀に関わる行事はすべて終了した。その後の追善法要は七日毎に営まれ、四九日目に当たる六月五日に、同師の遺骨はヴィハーラ・シヤキヤワナランの敷地内の仏塔に納められたとのことである。

三 葬儀を通して垣間見られた仏乗教団の現状

(一) 茶毘をスマトラ島で行った理由

さて、今回の一連の葬儀を通して、私自身が特に印象深く感じた三つの点を指摘しておきたい。それらはいずれもアシン・ジナラックイタ師の遺志を示唆するとともに、仏乗教団の現状を物語るものである。

まず始めに、最も重要な事柄は、アシン・ジナラックイタ師の茶毘がスマトラ島で行われたことである。同師の逝去が伝わると、その茶毘を地元で行いたいという要望が、インドネシア国内で仏教徒を多く抱える各地域から一斉に発せられたという。けれども、アシン・ジナラックイタ師の遺言に従って、茶毘の場所はバンダル・ランブン市の「菩提薩埵」火葬場に決定された。既に一九七七年に同師がこの地を訪れ、同火葬場の裏山に、インドネシア語で「カユ・

プティ (kayu putih) 一と呼ばれる八本の木を植えていたためである。この木は通常香油を採取するためのものであるが、アシン・ジナラツキタ師はそれらを用いて自らの茶毘が行われることを願っていたという。しかし、この八本のみでは薪が不十分であった。そのため、やはり同師自身の希望により、白檀を含む三種類の木が薪としてヴィハーラ・シヤキワナランから運ばれたと新聞記事は伝えている。

だが、それにしても何故、バンダル・ランプンが選ばれたのであろうか。アーリヤマイトリ師によれば、その理由は、インドネシア国内のすべての仏教徒が、民族の違いを越えて和合することをアシン・ジナラツキタ師が願ったためであるという。

先にも述べたように、インドネシアは多民族国家であり、同国の仏教徒の中にも様々な民族の出身者が含まれている。そのため、アシン・ジナラツキタ師は布教活動を進める中で、一部の民族に特有の、教義的な裏付けをもたない呪術的な習慣の排除を目指してきた。とりわけ、中国の民族的な因習は、その最も顕著なものであった。その結果、例えば寺院における巨大なロウソクや線香の使用とか、おもちゃ

の紙幣や家具などを葬儀の際に燃やすという中国的な風習は、今日ではあまり見かけなくなっている。しかし、中国の民間信仰に由来する神々への信仰は、それを信じる人々の存在を無視できないとの理由で容認された。そのため、アシン・ジナラツキタ師の態度は不徹底だという批判も一方には存在する。

そのような中であつて、中国系の仏教徒が大半を占めるジャカルタ市の周辺で、アシン・ジナラツキタ師の葬儀のすべてを行うことは好ましいことではなかった。と言うのも、同師自身も中国系インドネシア人であるために、同師の説いてきた仏教は、所詮中国系の人々のものだという誤解を招き、他の民族出身の仏教徒達の離反を招きかねないからである。もしもそうした事態になれば、同師が提唱した仏乗思想の理念は潰えることになるであろう。アシン・ジナラツキタ師は、仏乗教団に属する中国系の信者達とそれ以外の人々との間で、いつ分裂が起きてもおかしくないという危険性をはつきり認識していたと思われる。

それ故にこそ、同師は自らの葬儀の中で最も重要な茶毘をスマトラ島で行うことにしたのである。しかも、その地

域の仏教徒の中には、古代インドネシア仏教徒の末裔と言われる人々が多く含まれている。その地で茶毘が行われることによって、同師は自らの説く仏教が、あらゆる人々に開かれた普遍的宗教であることを示そうとしたのである。のみならず、仏乗思想はポロブドゥール遺跡を生み出したかつての仏教文化の伝統を受け継ぐものであり、他国の仏教をそのまま移入したものではないことをアピールしようとしたのかもしれない。いずれにせよ、そこには多彩な仏教信仰の形態をもつ様々な仏教徒を一つにまとめ、独自の「インドネシア仏教」を創造しようとしたアシン・ジナラツキタ師の強い意思を窺うことができるであろう。

（二）葬儀における禅宗様式の採用

第二に印象深い点は、これまで述べてきた事柄とは反対に、一連の葬儀が主に大乘仏教の様式、より正確には禅宗様式にのっとって行われたことである。確かにサンガ・アグン・インドネシアに所属する上座比丘や金剛乗比丘も葬儀に参列し、それぞれの流儀に従って経典の読誦を行った。しかしながら、主要な儀礼における導師はすべて招請され

た大乘比丘が務めており、それ以外の儀礼では大乘比丘のアーリヤマイトリ師が導師を務めている。また、茶毘の日まで、毎日四回行われた追善法要で読誦された経典はいずれも大乘仏教のものであったし、様々な場面においては阿弥陀仏の称名が繰り返された。

さらに、細かい点でも禅宗の葬送規定に従っていると思われる点が幾つか見出された。最も象徴的な事柄は、病院で横臥した状態で逝去したアシン・ジナラツキタ師の遺体を、弟子達が坐禅の姿勢に直して坐棺に納めたことである。北首西面の積尊入滅の姿勢ではなく、あえて坐禅の姿勢を選んだことは、明らかに禅宗様式を意図していると言える⁽⁶⁾。また、ヴィハハラ・エーカヤナグリハにおいて、同師の棺をメインホールの西側の部屋に安置したことや、遺骸が掲げられたことなども禅宗の規定に従ったものである⁽⁷⁾。

けれども、ここで思い起こせば、アシン・ジナラツキタ師は大乘仏教の沙弥として出家したものの、比丘としては上座仏教の具足戒を受けている。また、同師が一九五九年に現代インドネシアで最初の比丘僧伽を設立するために諸外国から招致した一三人の比丘は、いずれも上座仏教の比

丘であり、その場に大乘仏教の比丘は招かれていなかった。⁽⁹⁾しかも、一九六〇年代から七〇年代にかけて、タイの上座比丘達がしばしばインドネシアを訪れ、同国の仏教復興に関与している。それ故、この当時の情報にもとづいてインドネシアの現代仏教事情を叙述した論文などの中で、仏乗思想は上座仏教の混淆形態として紹介されてきた。

だが、そのような理解が、少なくとも現在では適切ではないことを、今回の一連の葬儀は如実に物語っている。確かに今日においても、仏乗思想とその教団が様々な点で上座仏教から大きな影響を受けていることは事実である。また、ヴィハラ・エーカーヤナグリハを訪れる仏教徒達の多くは、たとえ中国系の人々でさえも、上座仏教の教義に大きな魅力を感じると述べている。⁽¹⁰⁾しかし、その同じ人々が、阿弥陀仏や観音菩薩に対する信仰を保持し、故人の追善法要を大乘仏教の様式に従って営んでいるのである。しかも、現在のサンガ・アグン・インドネシアには、上座比丘のみならず大乘比丘や金剛乗比丘も数多く所属している。つまり、現在の仏乗教団は、最早ある特定の仏教思想やその流儀を中心とする混淆形態ではなく、むしろ、あらゆる

仏教信仰の形態を包括する総合仏教を目指しているとみなすべきであろう。そのように理解すれば、上座比丘であるアシン・ジナラツキタ師の葬儀が大乘仏教の様式で行われたとしても、特に問題視するには当たらない。同師の言葉を借りれば、重要なことは儀式の外観ではなく、それを実践する人々の仏教信仰そのものである。

とは言え、今回の葬儀に大乘仏教の様式が採用されたのは何故であろうか。その理由の十分な確認はできなかったが、一つの可能性として、葬儀全体を統括した首都ジャカルタの中心寺院であるヴィハラ・エーカーヤナグリハの住持が、大乘比丘のアリーヤマイトリ師であったことと関係があるのかも知れない。また、近年の仏乗教団の中で大乘仏教の要素が次第に強められており、そのことが今回の葬儀に反映されたのかもしれない。あるいは、アシン・ジナラツキタ師自身の意向を忖度することで、葬儀の様式が決定されたのかもしれない。

このことは、次に述べる事柄と大いに関わりがある。すなわち、追善法要における金剛般若経の読誦は、アシン・ジナラツキタ師自身が希望したことだという点である。同

師がそれを望んだ本当の理由はわからない。だが、それは恐らく、同師がかつて臨済宗の沙弥であったことと関係があるであろう。しかも、同師が禅仏教に親近感を懐いていたことは確かである。私が初めて面会した時に、同師は「自分も禅僧である」と述べ、禅仏教に対する親しみを口にされた。また、終生瞑想の実践を貫いた同師の中では、禅仏教の坐禅と、ビルマでマハーシ・サヤダウ師から伝授されたヴィパッサナー瞑想とが一つに結び付いていたと推測することも可能である。そうだとすれば、アシン・ジナラツキタ師の金剛般若経に対する愛着は、同師の禅仏教への親しみの象徴とみなすこともできるであろう。それに加えて、同師の最初の師匠である本清和尚への追慕の念が、禅宗の中で古くから重視されてきた金剛般若経への愛着として、同師の中で昇華されたのかもしれない。また、別の可能性として、この經典の中で説かれている空の思想が、同師の仏教信仰の中核になっていたことも考えられる。

いずれにせよ、生前のアシン・ジナラツキタ師は、あらゆる仏教の教えは究極的に同じものであり、どの流派の教えが特に優れているということはないと繰り返し説いてき

た。またそれ故に、自分がどの流派の教えを最も重視しているということも決して述べなかつた。だが、そのことと、特定の流儀に親しみを懐くことは自ずから別の問題である。同師は自らが幼少の頃から培ってきた観音信仰を、たとえそれが上座仏教の教義から外れていると非難されても捨てることはなかつた。それと同様に、上座仏教に触れる以前に慣れ親しんだ禅仏教への傾倒も、同師の中で失われることがなかつたのであろう。そのことが、アシン・ジナラツキタ師の葬儀を禅宗様式で行うことにつながつたのではないだろうか。

(三) アシン・ジナラツキタ師の神格化

第三に指摘すべき点は、アシン・ジナラツキタ師の荼毘の後で、約三〇センチ四方の箱に収められた遺灰とは別に、約四〇個の「仏舍利」が発見されたことである。その舍利を見た信者達は、異口同音にそれらが虹のような七色をしていたと語っており、ある新聞は、それらの舍利が「米や真珠のような形をしており、赤、青、白、黒、金の五色であった」と記している。その上で、これらの舍利は精神的

に高い境地に到達した者の遺骨からしか発見されないものであり、アシン・ジナラツキタ師の場合、生前に多くの修行を積んだために数多くの舍利が現れたのだという解説が付せられた。

私は、それらの「仏舍利」が生ずる真の原因を知らない。だが少なくとも、その出現がアシン・ジナラツキタ師の修行によるという説明を、多くの信者達が受け入れていることは興味深い現象である。しかも、実際には微妙な色むらがあるにすぎない小さな灰色の粒を、「虹のような七色」をしていたと語り伝えることによって、その実物を見ていない人々は色鮮やかな舍利の存在を空想するようになるであろう。ここに、私達は一つの「神話」の誕生を見ることが出来る。もつともアシン・ジナラツキタ師に関しては、その生前から同師の特殊な力に接し、それによって同師の説く仏教を信仰するようになったという人々が数多く存在した。その意味で、同師の神格化は既に早い時期から始まっていたのである。しかし、その傾向は、同師の逝去によって今後ますます強められていくであろう。同師の仏舍利をめぐる人々の反応は、まさにその始まりとみなすことがで

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

きるのである。

四 次世代への課題

過去二五〇〇年に及ぶ世界の仏教の歴史を振り返る時、私達はそれを教団と思想の分裂の歴史であったと言うことができる。これに対してアシン・ジナラツキタ師が目指したことは、それらの再統合という、まさに正反対の事柄であった。同師のこの挑戦は、インドネシア国内に住むすべての仏教徒の要請に応えようとしたことの必然的な結果であった。そして、このような試みが可能になったのは、皮肉にもインドネシア固有の仏教の伝統が既に数百年間において途絶えており、いかなる過去のしがらみをも受けることなく、現在の状況に即応した新しい仏教を自由に説くことができたからである。だが、それと同時に、インドネシアに仏教信仰を復興させたいというアシン・ジナラツキタ師の強い意思と、それを支えた彼の強烈な個性と指導力をも見逃すことはできないだろう。

そのアシン・ジナラツキタ師が逝去された今、同師が提唱した仏乗思想とその教団の団結を維持するためには、数

多くの課題が残されているように思われる。同師の葬儀に関する報告を終わるにあたり、その中から特に三つの課題を指摘しておくことにしたい。

第一の課題は、サンガ・アグン・インドネシアに所属する上座、大乘、金剛乗のそれぞれの比丘達の間における主導権争いを如何に回避し、僧伽の団結を堅持するかということである。アシン・ジナラツキタ師の生前中は、同師自身が同僧伽の設立者であるとともに、上座、大乘、金剛乗のいずれの流派に属する大半の比丘達にとつても、同師が直接もしくは間接の師匠であった。それ故、いわばアシン・ジナラツキタ師を扇の要とすることで、同僧伽の結束は守られてきた。

けれども、同師を失った以上、新たな代表者を同僧伽の中から選出しなければならない。しかも、様々な流派に属するすべての比丘が無条件で認める指導者を見出すことは容易ではない。また、もしも代表に選ばれた比丘が自らの流儀を他の比丘達に押し付けることがあれば、僧伽の結束は失われるであろう。そのようなことになれば、混乱は在家の信者達にも波及して、仏乗教団全体の団結が崩壊しか

ねない。その意味において、同僧伽に属する比丘相互の協調関係は、これまで以上に重要な意味をもつことになると思われる。

第二の点は、仏教信仰と結び付いた民族的特色、とりわけ、中国的な要素の排除の問題である。先にも触れたように、アシン・ジナラツキタ師は中国の呪術的な因習を除去することに努めてきた。だが、そのような要素が根絶されたわけではない。のみならず、公衆の面前における中国語と中国文化の使用を厳しく制限していたスハルト政権が崩壊し、現政権下ではそれらの使用がかなり広範に認められている。そうした中で、もしも中国系の仏教徒達が自らのアイデンティティーを再確認するために中国文化への回帰を行い、民族色の強い崇拜様式を復活させることがあれば、彼らとそれ以外の仏教徒達との間で摩擦が生ずることになるだろう。それは、まさしくアシン・ジナラツキタ師が死の直前まで危惧し続け、スマトラ島を自らの茶毘の地に選んだ最大の理由でもあった。けれども、その危険から逃れるためには、主に中国系の信者達の自覚に期待する以外に道はない。

第三の課題は、あらゆる仏教思想の統合を目指した仏乗教団の、学術的な裏付けをもつ体系的教義の構築である。そのためを試みは従来も行われてきた。だが、それは未だ完全とは言い難い。また、教義面で指導的な立場にある人々が、諸外国における仏教研究の成果をもとにして、自己流の解釈を加えている例も時折見受けられる。その結果、極めて独創的な理論もしばしば語られているようである。

しかしながら、これまではそうした事柄も大きな問題にはならなかった。と言うのも、アシン・ジナラツキタ師の存在自体が仏乗教団にとっては求心力の最大の源泉であり、同師の語る言葉こそが仏乗思想の最大の拠り所だったからである。しかも、あらゆる仏教の教えは一つであるという同師の言葉にもとづいて、上座、大乘、金剛乗のそれぞれ思想に大きな相違があるはずはないと大半の人々は信じている。インドネシアでは世界的水準の仏教研究が未だ行われていないために、それに対する疑問が生まれる余地も小さかったのである。

けれども、今後国内で仏教研究が進展するにつれて、従来説かれてきた教義の抱える問題点が、次第に明らかに

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

されていくであろう。その上、アシン・ジナラツキタ師が逝去した今となっては、仏乗教団の存立基盤は同師の存在そのものではなく、彼が遺した仏乗思想の中に求められることになる。そうだとすれば、体系的な仏乗教義の確立は、教団の維持のためにも、また、アシン・ジナラツキタ師が目指した「インドネシア仏教」を継承するためにも、次なる世代に託された必須の課題となるであろう。同時にそれは、様々に分化した仏教思想の再統合という、仏教史上における壮大な実験の成否の鍵を握っていると言っても過言ではない。

ヴィハーラ・シャキャワナランにおける法要が終わり、アシン・ジナラツキタ師の葬儀に関わるすべての行事が終了した夜、私は二〇人程の信者達の集まるティーパーティーに誘われた。会場は同寺院のすぐ前に位置するある女性信者の自宅であり、その一室がアシン・ジナラツキタ師の個人的な礼拝室として同師に捧げられていた。三〇坪程のその部屋には、アシン・ジナラツキタ師の写真とともに、上座式の釈迦牟尼像、大乘式の釈迦、阿弥陀、薬師の三如来像や観音像をはじめとする様々な仏菩薩像、金剛乗式の諸

尊格像、それに、晩年のアシン・ジナラツキタ師が「世師」と呼んで尊崇していたインドのサイ・ババの写真と、来臨する彼のための椅子などが整然と並べられていた。そこは、まさしく仏乗思想の具現した世界であり、アシン・ジナラツキタ師の目指す「インドネシア仏教」のモデルルームと呼ぶにふさわしい場所であった。この部屋に象徴されるような総合仏教が、今後インドネシアで着実に成長していくことができるであろうか。テラスのベンチに腰掛けて、目の前に広がるチパナスの丘と、ようやく姿を現した居待月を眺めつつ、私は穏やかに語る在りし日のアシン・ジナラツキタ師を思い起こしていた。

注記

- (1) アシン・ジナラツキタ師の世寿（数え年）について、インドネシアの中国語新聞は太陰曆に従って八一歳と記している。これは、同師の誕生日が太陽曆に従えば一月二三日であるが、太陰曆に直すと前年の一月八日となることによるものである。
- (2) 拙稿「インドネシアの仏教復興とその現状」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』八（二〇〇〇、二一六―二四六頁）、『全日本仏教会とインドネシア——一九五九年のウエサカ祭出

席と戦犯遺骨送還運動——』『禅研究所紀要』二八（二〇〇〇、九一―一三一頁）、『現代インドネシアの仏教信仰』『日本仏教学会年報』六七（二〇〇二、一八一―一九三頁）を参照。

(3) 二〇〇二年五月一日と二日にジャカルタのヴィハラ・エーカーナグリハに於て Ven. Bhikkhu Arjamatiri, Ven. Bhikkhu Dhamavimala, Mr. Hendwi Wijaya などから得た「教示にもとづいている。また、参照した新聞は『国際日報』『世界日報』『印度尼西亞商報』『Jawa Pos』、『Radar Lampung』、『Lampung Post』などである。インドネシア語の読解にあたっては、名古屋大学大学院に在籍中の Sugeng Tano 氏の協力を得た。

(4) 仏乗教団に属する寺院には、インドネシア語と中国語による二つの寺院名をもつ例が多い。概して、同国の独立以前に創建された中国系寺院では中国語の名称が、また、それ以後に創建された寺院ではインドネシア語の名称が一般的に用いられているようである。

(5) 遺誡は次の通りである。

「體解大道播種善果在南邦、正氣凜然歷盡艱辛永留芳」

(6) 現存する禅宗叢林の行動規範（清規）の中で、葬送儀礼に関する最古の規定を収載しているのは『禪苑清規』（一一〇三年自序）である。同清規における尊宿遷化（一寺の住職の逝去）の規定は、「もし己に坐化せば、方丈の中に置いて香華供養し」という書き出しで始まる。この一節に関して、成河

峰雄氏は「禅宗僧侶の遷化はかくあるべしと規定しているのである」と論じており（『禅宗の葬送儀礼』『禅研究所紀要』二四、一九九六、一三六頁）、松浦秀光氏は禅宗の四祖五祖六祖がいずれも坐化したと伝えられることに由来すると推測している（『尊宿葬法の研究』山喜房佛書林、一九八五、三三頁）。また、後に成立した『日用清規』（二二六三）では、「尊宿が遷化せば、……先ず浄髪し、沐浴し、著衣し跏趺せしめて入龕す」と規定しており、アシン・ジナラツキタ師の葬儀は事実上この規定に従ったことになる。なお、『禅苑清規』の引用文は鏡島元隆、佐藤達玄、小坂機融共著『訳注禅苑清規』（曹洞宗宗務庁、一九七二）により、それ以外の清規の規定に関しては松浦前掲書を参考にした（以下同じ）。

(7) 『禅苑清規』は「法堂の上の西の間に龕を置き、東の間に臥床・衣架・隨身用の具を鋪き設けて、法座の上に真を掛くと記している。棺を法堂の西の間に安置することは、後に作成される清規でも踏襲された。

(8) 遺誠を掲げることが、既に『禅苑清規』が「遺誠偈頌をもつて牌の上に貼し、靈筵の左右に掛けて」と記している。この規定は若干の変更を経ながらも、後の各種の清規に踏襲されている。

(9) 当時のインドネシアには中国人の大乗比丘が存在したはずであるが、彼らは一人も比丘僧伽の設立に招致されていない。また、この僧伽設立の翌日に、アシン・ジナラツキタ師

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

の発案によつて国際的なヴェーサカ祭がポロブドゥール遺跡で開催された。この祝祭に、日本からも一人の大乗比丘が招待されて出席したが、僧伽設立のことはこの比丘に対しても知らされていない。詳しくは、前掲拙稿「全日本仏教会とインドネシア」一〇二—一〇三頁を参照された。

(10) 例えば Heinz Bechert, "The Buddhayāna of Indonesia: A Synchronistic Form of Theravāda," *Journal of the Pali Text Society* 9 (1981), pp. 10-21 は「論文の題名自体がそのことを明示している。石井米雄氏も、アシン・ジナラツキタ師に従う仏教徒達を「中国仏教の影響を残しつつ独自の上座仏教を発展させようとするグループ」と評している（『インドネシアに伝えられた上座仏教』、石井米雄編『講座仏教の受容と変容2 東南アジア編』佼成出版社、一九九一、二五〇頁）。

(11) 前掲拙稿「現代インドネシアの仏教信仰」一八六頁を参照。

(12) 一九九七年に私が面会した際に、アシン・ジナラツキタ師は毎日午前二時頃から数時間、ベッドの上で瞑想を行っていると言ってくれた。

(13) 前掲拙稿「現代インドネシアの仏教信仰」一八六—一八七頁を参照。

〔追記〕 前掲拙稿「インドネシアの仏教復興とその現状」二二三頁、及び同「全日本仏教会とインドネシア」九九頁において、アシン・ジナラツキタ師によるインドネシア優婆塞・優



ヴィハーラ・エーカヤーナグリハに奉安された
アシン・ジナラッキタ師の遺体
(2002年4月18日、ヴィハーラ・エーカヤーナグリハ提供)



ヴィハーラ・エーカヤーナグリハを出発する葬列
(2002年4月26日、同上)



ジャカルタでの葬送を伝える新聞記事（「国際日報」2002年4月27日版）



1

Prosesi Kremasi Bhanie Ashlin

1. Gubernur Lampung Drs Oetoesana, saat menyerahkan secara simbolis jenazah meninggal V A Mubandaru Ashlin Jinarakhita kepada Bhanie Aya Madi di Wana Thyi Hin Bo.

2. Jenazah Bhanie Ashlin di barungakikan dari Wana Thyi Hin Bo. Terbelok ke mobil jenazah menuju Krematorium Boekhatwa, Lampung, Bandar Lampung.

3. Upacara sembahyang sebelum jenazah Bhanie Ashlin ditemunkan (Ditemani di depan pintu tempat kremasi, tampak Bhanie Shahu Cong Song, asal Singapura (gambar urutan kanan kreteria) yang hadir saat kremasi) memberikan pengharu maklurnya.

4. Jenazah Bhanie Ashlin yang telah dididakan di atas lumpukan kayu pulit, kapu gipokur dan logya pihar menuju pengempurnaan (penanti). Tamak narataan manila menjelag penyajian api kremasi.



3



2



4

バンドル・ラングンでの葬送と茶跽を伝える新聞記事より (“Radar Lampung” 16面、2002年4月29日版)

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）



大興廟に安置された棺と祭壇
(2002年4月28日)



読経する金剛乗比丘と、それを見守る大乘比丘
(大興廟にて、2002年4月28日)



大興廟を出発した棺と、それを見送る信者達
(バンドル・ランブン市内にて、2002年4月28日)



葬儀終了後に集会を行う比丘達
(ヴィハーラ・シャキャワナランにて、2002年4月30日)

世代交替を迎えるインドネシア仏教界（木村）

婆夷友好団体（PUI）の設立を一九五三年のことと記載した。けれども、これは一九五五年の誤りであり、同師が既にビルマで比丘としての具足戒を受けた後のことである。

〔謝辞〕 アシン・ジナラックタ師逝去の情報は、インドネシア在任の Mr. Suriadi Lunanda さんの令姪 Mrs. Yuanita Jade からいただいた。また、現地滞在中は Vihara Ekayana Grha の関係者のお世話になるとともに、Mr. Hendwi Wijaya, Mr. Hadi Ueh, Mr. Januar Kwan には特に便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げます。